

Title	校訂鬼谷子三卷訳稿 (2)
Author(s)	高田, 哲太郎
Citation	中国研究集刊. 2006, 42, p. 19-46
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61167
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

校訂鬼谷子三卷訳稿(2)

高田哲太郎

卷中(前半) 「飛箝第五」、「忤合第六」、「揣第七」、「摩第八」、「權第九」

鬼谷子 卷中

梁 陶 宏 景 注

飛箝 第五¹

凡度權量能、所以徵遠來近²。立勢而制事、必先察同異。別是非之語³、見内外之辭、知有無之數⁴。決安危之計、定親疏之事⁵。然後乃權量之、其有隱括、乃可徵、乃可求、乃可用⁶。

19

飛箝^{ひか} 第五

凡そ權を度り能を量るは、遠きを徵し近きを來らす所以なり。勢を立てて事を制するは、必ず同異を察す。是非の語を別ち、内外の辭を見、有無の數を知り、安危の計を決し、親疎の事を定む。然る後に乃ち之を權量し、其の隱括する有りて、乃ち徵すべく、乃ち求むべく、乃ち用ふべし。

19

飛箝 第五

そもそも權略(見識)を度り、能力(才能)を量る事は、遠くの国や人を引き寄せ、近くの国や人を自然とこちらに向わせるすべである。価値付けの原点としての有

力な立場を確立し、物事を自由に扱うには、必ずその前提として、先ず人の立場の同異を推察する。つまり、これにより、どの様なレベルでものを言っているのかをつかみ取り、人が是だ非だと判断している言葉の前提を識別し、内々の本音と、外、建前の言葉を觀察し、真実と虚偽の実際を見抜き、生き残るにはどうするかという安危の計を決定し、誰を探り、誰を捨てるかという親疎の事を定めるのである。その様に判断した後で、その前提に基き、相手がこの構想を実行するのにふさわしい権略（見識）、能力を有するかを實際に確かめはかり、具体的過程での調整を行えば、人を引き寄せることも、求めることも、用いることも出来るのである。 19

1 飛、謂作聲響以飛揚之。箝、謂牽持緘束、令不得脫也。言取人之道、先作聲響以飛揚之、彼必露情竭志而無隱。然後因其所好牽持緘束、令不得轉移也。

2 凡度其權略、量其材能、爲作聲響者、所以徵遠而來近也。謂賢者所在、或遠或近。以此徵來、若燕昭尊匱、即其事也。

3 言遠近既至、乃立賞罰之勢、制能否之事。事勢既立、必先察黨與之同異、別言語之是非。

4 外謂浮虛、內謂情實。有無謂道術能否。又必見其情僞之辭、知其能否之數也。

5 既察同異、別是非、見內外、知有無。然後與之決安危之計、定親疏之事、則賢不肖可知也。

6 權之、所以知其輕重、量之、所以知其長短。輕重既分、長短既形、乃施隱括以輔其曲直。如此、則徵之亦可、求之亦可、用之亦可。

引鉤箝之辭、飛而箝之7。鉤箝之語、其說辭也、乍同乍異8。其不可善者、或先徵之而後重累9。或先重以累而後毀之10。或以重累爲毀、或以毀爲重累11。其用或稱財貨、琦璋、珠玉、璧匱、采色以事之12、或量能立勢以鉤之13、或伺候見矚而箝之14。其事用抵巇15。 20

◎「匱」、道藏本「白」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。

鉤箝の辞を引き、飛して之を箝す。鉤箝の語、其の辞を説くや、乍同じく乍異なる。其の善くすべからざる者は、或は先づ之を徵して後に重累し、或は先づ重ぬるに累を以てして後に之を毀り、或は重累を以て毀と爲し、

或は毀を以て重累と為す。其の用、或は財貨、琦瑋、珠玉、璧帛、采色を称して以て之を事とし、或は能を量り勢を立てて以て之を鉤し、或は伺候して嚮¹⁰を見て之を箝す。其の事は抵巇を用ふ。

20

本音を誘い出し、その心を捕える言葉により相手を引き寄せ、持ち上げ賞賛することで本音をつかみ、その心をこちらにつなぎとめる。本音を誘い出し、その心を捕える言葉、それを實際にどう用いるかは、状況により「揜¹¹」し、心を開いて同調したかと思えば、閉じて立場を異にすることを示したりする。うまく動かせない相手には、先ずその人物をこちらに招き寄せておいてから精神的圧力をかけたり、先ず精神的圧力をかけておいてから、その人物を誹ったり、或いは精神的圧力をかけること自体で誹られていると感じさせたり、誹ることで精神的圧力をかけたりする。そのやり方は、或いは財産、珍重品、宝石、贈答品、華やかなものなどを掲げて、その人物の反応を観察したり、相手の能力を量り、それに見合うような責任のある地位、立場を示して、その本心を誘い出したり、相手の言動をよく観察し、その心の隙間を見抜きその心を捕えたりする。これらの事柄は、皆「抵巇」(物事の隙間を手当てすること。)の方法を用いる。20

7 鉤、謂誘致其情。言人之材性各有差品。故鉤箝之辭、亦有等級。故內感而得其情曰鉤、外譽而得其情曰飛。得情即箝持之、令不得脫移。故曰鉤箝、故曰飛箝。

8 謂說鉤箝之辭、或揜而同之、或闔而異之、故曰、乍同乍異也。

9 不可善、謂鉤箝之辭、所不能動。如此者、必先命徵召之。重累者、謂其人既至、然後狀其材術所有。知其所能、人或因此從化也。

10 或有雖都狀其所有、猶未從化。然後就其材術短者、皆毀之、人或過而從之、言不知化者也。

11 或有狀其所有、其短自形。此以重累爲毀也。或有歷說其短、材術便著。此以毀爲重累也。爲其人難動、故或重累之、或皆毀之、所以驅誘之、令從化也。

12 其用、謂人既從化、將用之、必先知其性行好惡、動以財貨、采色者、欲知其人貪廉也。

13 量其能優劣、然後立去就之勢以鉤其情、以知其知謀也。

14 謂伺彼行事、見其罅隙而箝持之、以知其勇怯也。

15 爲此上事用抵轍之術而爲之。

將欲用之於天下、必度權量能、見天時之盛衰、制地形之廣狹、岨嶮之難易、人民貨財之多少、諸侯之交孰親、孰疏、孰愛、孰憎¹⁶、心意之慮懷、審其意、知其所好惡、乃就說其所重、以飛箝之辭、鉤其所好、以箝求之¹⁷。21

◎ 「於」、道藏本無し。嘉慶十年本に従つて補う。

將に之を天下に用ひんと欲すれば、必ず權を度り能を量り、天時の盛衰を見、地形の広狭、岨嶮^{そげん}の難易、人民財貨の多少、諸侯の交、孰れか親、孰れか疎、孰れか愛し、孰れか憎むを制し、心意の慮懷は其の意を審にし、其の好惡する所を知り、乃ち就きて其の重んずる所を説き、飛箝の辭を以て其の好む所を鉤し、箝を以て之を求む。21

これを天下に用いようとするなら、必ず君主に相当する人物の権略（見識）をはかり、能力（才能）を量り、世界の情勢の変化盛衰を観察し、土地の広狭、山岳（河

川）の要害の程度、といった地勢的狀況、人口、經濟の程度、外交の狀態、諸侯間の交流の親疎、愛憎の關係を押さえ、彼が心の中で何を思い何を望んでいるのか、その意志を詳らかにし、彼の好惡をつかみ、そこで彼の重んじていることを説き、「飛箝」（言葉で本音を誘い出し、心を捕えること。）の言葉により、彼が好むところを誘い出し、その心を捕える言葉でもって、こちらの意圖の達成、つまり彼を制し、自由に動かすことを求めるのである。21

16 將用之於天下、謂用飛箝之術、輔於帝王。度權量能、欲知帝王材能可輔成否、天時盛衰、地形廣狹、人民多少。又欲知天時、地利、人和合其泰否、諸侯之交、親疏愛憎、又欲知從否之衆寡。

17 既審其慮懷、知其好惡。然後就其所最重者而說之、又以飛箝之辭鉤其所好。既知其所好、乃箝而求之。所好不違、則何說而不行哉。

用之於人、則量知能、權材力、料氣勢、爲之樞機、以迎之、隨之、以箝和之、以意宜之、此飛箝之綴也¹⁸。用之於人、則空往而實來、綴而不失。以究其辭、可箝而從、

可箝而横、可引而東、可引而西、可引而南、可引而北、
可引而反、可引而覆¹⁹。雖覆能復、不失其度²⁰。 22」

◎「之」、道藏本無し。嘉慶十年本に従つて補う。

之を人に用ふれば、則ち知能を量り、材力を権り、氣勢を料り、之が枢機と爲し、以て之を迎へ、之に随ひ、箝を以て之を和し、意を以て之を宜しくす、此れ飛箝の綴なり。之を人に用ふれば、則ち空もて往きて実もて来り、綴して失はず。以て其の辞を究むれば、箝して従にすべく、箝して横にすべく、引きて東すべく、引きて西すべく、引きて南すべく、引きて北すべく、引きて反すべく、引きて覆すべし。覆すと雖も能く復し、其の度を失はず。 22」

これを人に用いようとするなら、知能を量り、見識をはかり、氣力を測つて、これを判断基準とし、こちらから出たり、相手に従つたりして対応し、心を捕える言葉でもつてその人物をこちらに同化し、こちらの意によつてその人物を然るべく扱ふ。これが「飛箝」の、人の心をこちらに縫い付けるはたらきである。これを人に用いるなら、空手で行つて実を得て帰るように、言葉に由つて実際に人を支配でき、人をこちらに縫い付けて、失う

ことはない。この「飛箝」という考え方に立ち、その用いる言葉を究め、これに精通するなら、「箝」して心を捕え、縦にも横にもでき、東西南北いずれへも引くことができ、その人物を引き寄せて、「反」して、こだわらずに問いかけ、その前提をつかむことも出来るし、「覆」して、そのつかんだ前提から、その既成の価値を覆し、実際の有るべき姿を示すことも出来る。この「飛箝」ということに精通しているなら、相手の前提を覆したとしても、自然なあり方に復帰することができ、その主体としての物差しを失うことはない。 22」

18 用之於人、謂用飛箝之術於諸侯也。量智能、料氣^國者、亦欲知其智謀能否也。樞、所以主門之動靜、機、所以主弩之放發。言既知其諸侯智謀能否、然後立法鎮其動靜、制其放發、猶^國之於門、機之於弩。或先而迎之、或後而隨之、皆箝其情以和之、用其意以宜之。如此則諸侯之權、可得而執、己之恩^國、可得而固。故曰、飛箝之綴也。謂用飛箝之術連於人也。

19 用之於人、謂以飛箝之術任使人也。我^國但以聲譽^國揚之。故曰、空往。彼則開心露情、歸附於己、故曰、實來。既得其情、必綴而勿失。又令敷奏以言、以究其辭。如此則從橫東西南北

反覆、謂在己之箝引、無患不服也。

20 雖有覆敗、必能復振、不失其節度、此箝之終也。

忤合 第六 1

凡趨合倍反、計有適合²。化轉環屬、各有形勢。反覆相求、因事爲制³。是以聖人居天地之間、立身御世、施教揚聲明名也、必因事物之會、觀天時之宜、因⁴知所多所少。以此先知之、與之轉化⁴。世無常貴、事無常師⁵。聖人無常與無不與、無所聽無不聽⁶。成於事而合於計謀、與之爲主⁷。合於彼而離於此、計謀不兩忠⁸。必有反忤。反於是、忤於彼、忤於此、反於彼。其術也⁹、用之於天下、必量天下而與之、用之於國、必量國而與之、用之於家、必量家而與之、用之於身、必量身材能氣勢而與之。大小進退、其用一也¹⁰。必先謀慮、計定而後、行之以飛箝之術¹¹。

◎「知」、道藏本「之」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。

◎「無常與無不與、無所聽無不聽」、道藏本「常爲無不爲、所聽無不聽」に作る。嘉慶十年本に従つて改める。◎「於」の四字、道藏本欠。嘉慶十年本に従つて補う。

忤合 第六

凡そ趨合、倍反は、計に適合する有り。化転、環屬するに各々形勢有り。反覆相ひ求め、事に因りて制を爲す。是以て聖人、天地の間に居り、身を立て世を御し、教を施し声を揚げ、名を明らかにするや、必ず事物の会に因り、天時の宜を觀、因りて多とする所、少とする所を知る。此を以て先づ之を知り、之と転化す。世に常貴無く、事に常師無し。聖人は常與無くして與らざる無く、聽く所無くして聽かざる無し。事を成し計謀に合すれば、之に與りて主と爲る。彼に合すれば此より離る。計謀は兩忠ならず。必ず反忤有り。是に反すれば彼に忤し、此に忤すれば彼に反す。其の術や、之を天下に用ふれば、必ず天下を量りて之に與り、之を國に用ふれば、必ず國を量りて之に與り、之を家に用ふれば、必ず家を量りて之に與り、之を身に用ふれば、必ず身の材能、氣勢を量りて之に與る。大小進退、其の用は一なり。必ず先づ謀慮し、計、定まりて後、之を行ふに飛箝の術を以てす。23

忤合 第六

そもそも、ある人や組織に付くか離れるかには、それ

にふさわしい計というものがある。態度を変化させ、立場を転じ、さまざまの勢力を廻つていずれに属するかには、各々形勢というものがある。そこで、「反覆」し、こゝだわらずその前提を尋ね、とらわれずそこから既成の見方を越え、その具体的事例に因り対応し、主体としてそのことをコントロールする。だから、聖人は、この天地の間、現象界にあつて、自分自身を然るべくその社会に位置づけ、その世の中を押さえ、心をつかむ言葉とあり方を示し、評価と信頼を獲得する時には、必ず物事のそれがそうなる前提、ポイントに因り、行動にふさわしい情勢を見抜き、そこで何を為すべきか、為さざるべきかを知るのである。このような認識のもと、先ず、現実、現象を知り、この現実に関わり無限に変化対応する。世の中には、常に絶対的に貴いものはなく、物事には、これさえあればとか、これさえ信ずればよい、という絶対的手本、基準、師とするものなど存在しない。すべての權威は相対的であり、錯覚だということである。聖人は、常にその立場に立つという立場というものはなく、あずかるべきにあずかるのであり、必ず聴くという言説は無く、聴くべきものを聴くのである。つまり、こちらの目的とすることを完成させ、こちらの計謀に合致するならば、その立場、考え方に関わつて、その中心となるので

ある。そこで、当然、ひとつの立場に合致すれば、その対極の立場からは離れることになる。計謀というものは、あれもこれも思い通りになるというものではない。必ず、「反忤」、つまり、こゝだわらずに認めるべきを認めたり、背くべきに背いたりということが出てくる。ひとつの立場を、こゝだわらず認めれば、結果として、その対極の立場に背くことになり、ひとつの立場に背くなら、結果としてその対極の立場を、こゝだわらずに認めることになる。その「反忤」の術、運用は、天下、その世界に用いる時は、必ずその天下、その世界を量り、こうだということとろをつかんだ上で、これに関わり、その国に用いる時は、必ずその国を量り、こうだということとろをつかんだ上で、これに関わり、その家に用いる時は、必ずその家を量り、こうだということとろをつかんだうえで、これに関わり、自分自身に用いる時は、必ず自分自身の素質、能力、氣迫、勢力を量り、こうだということとろをつかんだ上で、これに関わり扱う。対象の大小、行動の進退、といった区別はあるが、その用い方は一つである。必ず先に謀り考え、計を定めてから、「飛箝」(本音を誘い出し、その心を抑える言葉により引き寄せること。)の術、方法によつて、この「反忤」の術を行うのである。

1 大道既隱、正道不得、坦然而行。故將合於此、必忤於彼。令其不疑、然後可行其意。**〔若〕**律、呂之去就、是也。

2 言趨合倍反、雖參差不齊、然施之計謀、理乃適合也。

3 言倍反之理、隨化而轉、如連環之屬。然其去就各有形勢。或反、或覆、理自相求、莫不因彼事情爲之立制也。

4 所多所少、謂政教所宜多所宜少也。既知多少所宜、然後爲之增減。故曰、以此先知。謂用倍反之理知之也。轉化、謂轉變以從化也。

5 能仁爲貴、故無常貴。立善爲師、故無常師。

6 善必爲之、故無不爲。無稽之言、不聽、故無所聽。

7 於事必成、於謀必合、如此者與衆立之、推以爲主也。

8 合於彼、必離於此、是其忠謀不得兩施也。

9 既有不兩施、宜行反忤之術。反忤者、意欲反合於此、必行忤於彼。忤者設疑似之事、令味者不知覺其事也。

10 用之者、謂**〔反〕**忤之術。量者、謂**〔量〕**其事業有無。與、謂與之親。凡行忤者、必稱其事業所有而親媚之、則暗主無從而覺。故得行其術也。所行之術、雖有大小進退之異、然而至於稱事揚親、則一。故曰、其用一也。

11 將行反忤之術、必須先定計謀、然後行之。又用飛箝之術以彌縫之。

古之善背向者、乃協四海包諸侯、忤合**〔天〕**地而化轉之、然後求合¹²。故伊尹五就湯、五就桀、而不能有所明、**〔而〕**然後合於湯。呂尙三就文王、三入殷、而不能有所明、然後合於文王¹³。此知天命之筮。故歸之不疑也¹⁴。非至聖達與、不能御世、**〔非〕**勞心苦思、不能原事。不悉心見情、不能成名。材質不惠、不能用兵。忠實無僞、不能知人。故忤合之道、己必自度材能知睿、量長短遠近、孰不如¹⁵、乃可以進、乃可以退、乃可以縱、乃可以橫¹⁶。 24

◎「天」、道藏本「之」に作る。四庫全書本に從つて改める。

◎「然後求合」、道藏本「然後以之求合」に作る。「以之」二字衍。嘉慶十年本に從つて削る。◎「而不能有所明」道藏本欠。嘉慶十年本に從つて補う。◎「非至聖達與」、道藏本「非至聖人達與」に作る。「人」字衍。嘉慶十年本に從つ

て削る。◎「非」、道藏本欠。嘉慶十年本に従つて補う。

古の善く背向する者は、乃ち四海を協あはせ諸侯を包み、天地に忤合して化して之を転じ、然る後に合を求む。故に伊尹いゐんは五たび湯に就き、五たび桀に就くも、明らかにする所有る能はず、然る後に湯に合す。呂尚は三たび文王に就き、三たび殷に入るも、明らかにする所有る能はず、然る後、文王に合す。此れ天命の筈を知る。故に此れに帰して疑はざるなり。至聖、達奥に非ざれば、世を御する能はず、心を勞し思を苦しましむるに非ざれば、事を原もとぬる能はず、心を悉つくし情を見ざれば、名を成す能はず。材質、恵まれざれば、兵を用ふる能はず、忠実、真無くんば、人を知る能はず。故に忤合の道は、己、必ず自ら材能、知睿を度り、長短遠近、孰れか如かざるを量らば、乃ち以て進むべく、乃ち以て退くべく、乃ち以て縦すべく、乃ち以て横すべし。

24

過去の、的確に背くべき、就くべき相手を見抜いたものは、その視野に、天下四海を調和させ、諸侯を包み込み、天地世界の現象に忤合対応し、一体化して、その視点を、見るべきものを見るように転換し、そうした後に、就くべき相手を求めたのである。

だから、伊尹は五度湯王に就き、五度桀に就いたが、それでもはつきりと就くべき相手をつかむことができず、苦悩することにより、その視点を上昇させ、見るべきを見るという点に到達し、そうした後で湯王に就いたのである。

呂尚は、三度周の文王に就き、三度殷に入ったが、それでもはつきりと就くべき相手をつかむことができず、苦悩の末、的確につかみうる視点に到達し、そうした後で文王に就いたのである。この二人は、「天命の筈」、つまり、「その人に於いて、人為を以てしては動かし難い、その人のあり方を示す言葉」を見出したのである。だから、そのあるべきあり方に合致する現実の具体的立場に確信を持つて立ち、そのものとして行動できたのである。既成の価値、言葉にしがみつきとられ、それによつて自らを位置づけ安心しようとする己を越え、あるべきあり方に到つた聖人、言葉の枠の中で、人と己を比べて胡座をかか様なあり方を自ら否定し、その枠自体を生み出す原点としてのあり方、言葉の奥のその言葉を生み出す心そのものに達したものでなければ、言葉によつて組み上げられたこの世界を統御することはできない。現実に対応し、自らの心に嘘をつかなければ、当然不利益な事が多いが、心を疲れさせ現実の圧力に耐え筋を貫き、思

いを苦しめ、その納得のいく解決法を見出そうとしないようであれば、物事の原点、それが何故それであるのかを探し当て、見出すこともできないし、心を尽くしとられず人の本音のありようを見据えなければ、名を成し、世間にその評価を動かしたいものと認めさせることはできない。苦難に耐え、主体を保持し得る材質に恵まれていなければ、軍を動かすことはできない。自らに嘘をつかず、白を白と認める真が無ければ、人を知ることとはできない。だから、「忤合之道」(就くか離れるかの判断の方法。)は、自らが、必ず自らその素質、能力、知識、見識をはかり、そして、その事についての優劣、およびその関係の親疎について、我と人と、いずれが及ばないかはかるなら、自由に進んだり退いたり、そのことを自由に位置づけたりすることができるのである。 24]

12 言古之深識背向之理者、乃合同四海、兼并諸侯、驅置忤合之地、然後設法變化而轉移之。衆心既從、乃求其真主而與之合也。

13 伊尹、呂尚所以就桀紂者、以忤之、令不疑也。彼既不疑、然後得合於其真主矣。

14 以天命臣於殷湯文王、故二臣歸二主不疑也。

15 夫忤合之道、不能行於勝己、而必用之於不我若。故知誰不如、然後行之也。

16 既行忤合之道於不如己者、則進退縱橫、唯吾所欲耳。

揣摩 第七

古之善用天下者、必量天下之權、而揣諸侯之情。量權不審、不知強弱輕重之稱。揣情不審、不知隱匿變化之動靜。

何謂量權。曰、度於大小、謀於衆寡。稱貨材有無之數、料人民多少、饒乏、有餘不足幾何。辨地形之險易孰利、孰害、謀慮孰長、孰短、揆君臣之親疏孰賢、孰不肖與賓客之知審孰少、孰多、觀天時之禍福孰吉、孰凶、諸侯之親、孰用、孰不用、百姓之心、去就變化、孰安、孰危、孰好、孰憎、反側孰便、能知如此者、是謂量權。 25]

◎ 「古之善用天下者、稱貨材有無之數」、道藏本は「揣摩第七」以下に注として記載する。道藏本「貨材」の下、「之一」字有り。嘉慶十年本によつて削る。道藏本「之數」の二字欠。嘉慶十年本によつて補う。この部分、嘉慶十年本は本

文とする。四庫全書本も同じ。二本に従う。◎「料人民多」、
道藏本欠。嘉慶十年本、四庫全書本によって補う。◎「揆」、
道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。◎この25」の本文は、
「權篇第九」の本文が竄入したものと考えられる。(房立
中の説)

と謂ふ。25」
揣 第七

揣 第七

古の善く天下を用ひる者は、必ず天下の權を量り、諸侯の情を揣す。權を量ること審ならざれば、強弱、輕重の稱を知らず。情を揣すること審ならざれば、隱匿、變化の動靜を知らず。

何をか權を量ると謂ふ。曰く、大小に度り、衆寡に謀る。貨財、有無の数を称り、人民の多少、饒乏、有餘不足の幾何なるかを料り、地形の險易、孰れか利あり、孰れか害ある、謀慮、孰れか長じ、孰れか短なるかを辨じ、君臣の親疎、孰れか賢にして、孰れか不肖なると、賓客の知審、孰れか少く、孰れか多きかを揆り、天時の禍福、孰れか吉にして、孰れか凶なる、諸侯の親、孰れか用ひ、孰れか用ひざる、百姓の心、去就、變化、孰れか安にして、孰れか危く、孰れか好み、孰れか憎む、反側孰れか便なるかを觀る、能く此の如き者を知る、是れ權を量る

古の、的確にその天下、世界を動かした者は、必ず「天下の權」、(その世界の価値基準)を量り、諸侯の「情」(本音)を揣して推し量った。「權」を詳らかに量らなければ、本当の強弱、実力、事の重要度の基準はわからぬ。「情」を詳らかに揣し推し量らなければ、隠された実態、變化の動靜はわからない。

「權」を量るといふのは、大きいか小さいかと言う点で量り、多いか少ないかという点で量る、つまり、大きいということに基いて考えているか、小さいということに基いて考えているか、あるいは、多いということ、少ないということに基いて考えているのか、その基準の置き所の程度を量るのである。それは、物資、資産の有無の程度をはかり、人口、經濟状態の程度をはかり、地理的条件の利不利、計画構想判断能力の優劣を判別し、君臣關係の個々の親密度の状態、つまり、賢者(克己者)と不肖者(エゴイスト)がどの程度の状態で関わっているのかと、賓客(顧問、アドバイザー)の具体的能力、見識の程度をはかり、時代の状況として、どのようなも

のがどう有利にはたらくか、不利にはたらくのか、諸侯間の親交に於いては、誰が誰を用いているのか、また用いていないのか、人民の、上への信頼度の動向変化については、安定しているのか、危険な状態であるのか、上を好んでいるのか、憎んでいるのか、反側（寝返り）については、誰がその可能性が高いのかを観察する。この様な事を知ることができるといふ事、これが、「権」を量るといふ事である。

25

1 天下之情、必見於權也。善於量權、其情可得而知之。知其情而用之者、何適而不可哉。

揣情者、必以其甚喜之時、往而極其欲也。其有欲也、不能隱其情。必以其甚懼之時、往而極其惡也。其有惡也、不能隱其情。情欲必^出其變²。感動而不知其變者、乃且錯其人勿與語、而更問^其所親、知其所安³。夫情變於內者、形見於外。故常必以其見者而知其隱者、此所謂測深揣情⁴。

26

◎ 「出」、道藏本「失」に作る。嘉慶十年本によって改める。
◎ 「其」、道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。

情を揣すとは、必ず其の甚だ喜ぶの時を以て、往きて

其の欲を極む。其の欲有るや、其の情を隠す能はず。必ず其の甚だ懼るるの時を以て、往きて其の惡を極む。其の惡有るや、其の情を隠す能はず。情、欲は必ず其の變に出づ。感動するも其の變を知らざる者は、乃ち且く其の人を錯^{おそ}きて與に語る勿れ、而ち更に其の親しむ所に問ひて、其の安んずる所を知る。夫れ情、内に變ずる者は、形、外に見る。故に常に其の見るる者を以てして其の隠るる者を知る、此れ所謂、深を測り情を揣するなり。

26

「情」を揣して推し量るとは、必ずその人物が非常に喜んだときに、直に彼が望むところを突き止めるのである。その人物に望むところがあるなら、このような時にはその本音を隠すことはできない。また、必ずその人物が非常に怯えているときに、直に彼が憎むところを突き止めるのである。その人物に憎むところがあるなら、このような時には、その本音を隠すことはできない。「情欲」（本音、願望）というものは、必ずその人物の心の変化したときに現れる。何事かに感動した時でも、その心の変化がわからない人物は、しばらくその人を避け、話をしてはいけない。そうして、更に、その人物が親しんでいる人物に尋ね、彼が拠つて立つところを知るのである。

そもそも「情」(本音)というものは、心の内で変化があつたときは、形として外面に現れるものである。だから、常に必ずその現れたものによつて、その背後の隠されたものをつかむのである。これが、所謂、深いところを測り、本音を揣して推し量るといふことである。 26」

2 夫人之性、甚喜則所欲著。甚懼則所惡彰。故因其彰著而往極之。惡欲既極則其情不隱。是以情欲因喜懼之變而生也。

3 雖因喜懼之時、意欲惡感動、而尙不知其變、如此者乃且置其人無與之語、徐徐更問其人之所親、則其情欲所安、可知也。

4 夫情貌不差、內變者必見外貌。故常以其外見而知其內隱。觀色而知情者、必用此道。此所謂測深揣情也。

故計國事者、則當審量權、說人主則當審揣情。謀慮、情欲、必出於此⁵。乃可貴、乃可賤、乃可重、乃可輕、乃可利、乃可害、乃可成、乃可敗、其數一也⁶。故雖有先王之道、聖智之謀、非揣情、隱匿無所索之。此謀之大本也。而說之法也⁷。常有事於人、人莫能先⁸。先事而至、此最難爲⁹。故曰、揣情、最難守司。言必時其謀慮⁹。故觀蜎飛蠕動、無不有利害、可一生事美。生事者、幾之

勢也¹⁰。此揣情飾言成文章而後論之¹¹。

◎「能」、「先」道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。

故に国事を計る者は、則ち当に権を量るに審なるべく、人主に説くは、則ち当に揣情に審なるべくし。謀慮、情欲、必ず此より出づ。乃ち貴くすべく、乃ち賤しくすべく、乃ち重んずべく、乃ち軽んずべく、乃ち利すべく、乃ち害すべく、乃ち成すべく、乃ち敗るべきも、其の数は一なり。

故に先王の道、聖智の謀有りと雖も、情を揣するに非ざらば、隱匿、之を索むる所無し。此れ謀の大本なり。而して説の法なり。常に事の人に有るも、人、能く先んずる莫し。事に先んじて至る、此れ最も爲し難し。故に曰く、「情を揣するは、最も守司し難し、」と。言ふころは、必ず其の謀慮に時あり。故に蜎飛蠕動を観るに、利害有らざる無く、以て事の美を生ずべし。事を生ずるは、幾の勢なり。此れ情を揣し言を飾り、文章を成して後、之を論ずるなり。

だから、国事を計るには、詳細に「権」(価値基準)を量らねばならず、君主に説く場合には、その「情」(本音)を推し量ることに精密でなければならぬ。相手の計画

27」

や本音、欲望は、必ずこの手続きによつて、眼前に現れる。そこでこれをつかんでしまえば、自由自在に相手を扱い、貴くも卑しくも、重視させることも軽視させることも、利することも害することも、完成させることも挫折させることもできるが、相手のレベル、意図を読み取ることとで主体を確立し、支配するという、その道理は同じ事である。

だから、「先王の道」、「聖智の謀」といつた過去の優れた手本、マニュアル、知識があつたとしても、相手の本音、「情」を描して推し量るといふことがないなら、相手の隠された意図、本音は、これを求めるすべがない。「揣情」は、謀の根本であり、説得の方法である。常に事柄は人の目の前にあるが、たいてい誰もその事に先んずることができない。その事に先んじて至る、つまり先見の明、これが最も難しいものなのである。だから、次のように言われる、「本音を描して推し量ることは、最もその立場を守り然るべく扱うことが難しいものである。」と。これは、必ずその計画には、その時というものがあつて、ということである。だから、飛び回り這い回る昆虫の動きを見ても、利害に左右されないものではなく、その時に因つて動くからこそ、美しい光景を生み出せるのである。そして、そのことを生ずるものは、ほんのかすか

な兆しの流れなのである。これが、本音を描して推し量り、言葉を飾り、文章を作り上げて、それから論ずるといふことなのである。 27

5 審權量、則國事可計、審揣情、則人主可説。至於謀慮情欲、皆揣而後行。故曰、謀慮情欲、必出於此也。

6 言審於揣術、則貴賤成敗、唯己所制、無非揣術所爲。故曰、其術、一也。

7 先王之道、聖智之謀、雖弘曠玄妙、若不兼揣情之術、則彼之隱匿、從何而求之。然則揣情者、乃成謀之因本而説之法制也。

8 挾揣情之術者、必包獨見之明。故有事於人、人莫能先也。又能窮幾盡變、故先事而至。自非體玄極妙、則莫能爲此矣。故曰、此最難爲者也。

9 人情、險於山川、難於知天。今欲揣度而守司之、不亦難乎。故曰、揣情、最難守司。謀慮、出於人情、必當知其時節。此其所以爲最難也。

10 蝟飛蠕動、微虫耳。亦猶懷利害之心。故順之則喜悅、逆之則

勃怒。況於人乎、況於鬼神乎。是以利害者、理所不能無。順逆者、事之所必行。然則順之招利、逆之致害、理之常也。故觀此可以成生事之美。生事者、必審幾微之勢。故曰、生事者、幾之勢也。

11 言既揣其情、然後修飾言語以遵之。故說辭必使成文章而后可論也。

摩 第八

摩者、揣之術也。内符者、揣之主也¹。用之有道。其道必隱²。微摩之以其所欲、測而探之、内符必應。其所應也、必有爲之³。

故微而去之、是謂塞竅匿端、隱貌逃情、而人不知。故能成其事而無患⁴。摩之在此、符之在彼。從而應之、事無不可⁵。 28

◎「摩者、揣之術也」、道藏本「摩之符也」に作る。嘉慶十年本によって改める。◎「所」、「能」、道藏本欠。嘉慶十年本によって補う。

摩 第八

摩は、揣の術なり。内符は、揣の主なり。之を用ふるに道有り。其の道は、必ず隠にす。微に之を摩するに其の欲する所を以てし、測りて之を探れば、内符、必ず応ず。其の応ずる所や、必ず之を為す有り。

故に微にして之を去る、是れ竅を塞ぎ、端を匿し、貌を隠し情を逃れて人知らず、と謂ふ。故に能く其の事を成して患無し。之を摩するは此に在り、之に符するは彼に在り。従りて之に応ずれば、事、可ならざる無し。 28

摩 第八

「摩」（探りを入れること。）は、「揣」（本音を推し量ること。）の技術である。「内符」（心の内の割符、その氣、具体的好悪。）は「揣」の主体である。「摩」を用いるには、然るべき道、方法がある。その方法とは、必ずそれとわからないように、その意図を隠すということである。密かに相手を「摩」するには、相手が望んでいるものを用い、推測して相手の本音を探つたならば、相手の「内符」（その氣）は必ず反応する。それが反応すれば、必ずその事について動きが現れる。そこで、密かにこち

らの意図を明らかにせず、相手から離れる。これが、あけた穴を塞ぎ、兆しを隠し、こちらの様相を隠し、相手の本音に関わらないよう逃れ去って、誰も気づかない、ということである。だから、そのことを成し遂げても心配はないのである。「摩」主体はこちらにあり、「符」(その氣)は相手にある。そこでこれに対応し行動すれば、できない事はない。

28

1 謂揣知其情、然後以其所欲摩之。故摩爲揣之術。内符者、謂情欲動於内、而符驗見於外。揣者、見外符而知内情。故曰、**内符**、爲揣之主也。

2 揣者、所以度其情慕、摩者、所以動其**内符**。用揣摩者、必先定其理。故曰、用之有道。然則以情度情。情本潛密。故曰、其道必隱也。

3 言既揣知其情所趨向、然後以其所欲、微而摩之。得所欲、而情必動、又測而探之。如此則**内符**必應。内符必應、必欲爲其所爲也。

4 君既**内符**爲、事必可成、然後從之。臣事貴於無成有終。故微而去之爾。若已不同於此計、令功歸於君、如此可謂塞翁匿端、

隱貌逃情。情逃而竊塞、則人何從而知之。人既不之所以息其僭妬。故能成事而無患也。

5 此摩甚微、彼應自著。觀者但覩其著而不見其微。如此、用之功、專在彼。故事無不可也。

古之善摩者、如操鉤而臨深淵、餌而投之、必得魚焉。

故曰、主事日成而人不知、主兵日勝而人不畏也⁶。聖人謀之於陰。故曰、神。成之於陽、故曰、明⁷。所謂主事日成者、積德也。而民安之、不知其所以利。積善也。而民道之、不知其所以然、而天下比之神明也⁸。主兵日勝者、常戰於不爭不費、而民不之所以服、不知所以畏而天下比之神明⁹。

29

古の善く摩する者は、**鉤**を操りて深遠に臨み、餌して之を投ずれば、必ず魚を得るが如し。故に曰く、事に主たりて日々成るも、人は知らず、兵に主たりて日々に勝つも、人は畏れず、と。聖人は之を陰に謀る、故に曰く、神。之を陽に成す、故に曰く、明。所謂、事に主たりて日々成るとは、徳を積むなり。而して民、之に安んじ、其の利する所以を知らず。善を積むなり。而して民、之を道とし、其の然る所以を知らず、而して天下、之を神

明に比するなり。兵に主たりて日々に勝つとは、常に不
争、不費に戦ひ、而して民、服する所以を知らず、畏る
る所以を知らず、而して天下、之を神明に比す。 29」

古の、「摩」に長けた者は、釣り針を操り深淵に臨み、
餌をつけて針を投げ入れれば、必ず魚を得るといったも
のようであった。だから、「中心となって物事を行い、日
々にその成果を挙げて、人々にはわからない」し、「軍
の中心として日々勝ち続けても人は恐れない。」と言うの
である。(事前に事をつかみ対応しているので、自然な形
としか思われないのであり、それは、釣りのように然る
べく餌を投げ入れれば、水の中は見えなくとも、魚は食
いつく様に当然の成果なのである。) 聖人は、この様な事
を陰かに構想する。だから、「神」(人の合理的判断で捕
えられぬ、目に見えぬはたらき、深層意識。)と言われる。
そのことを、はつきりした形で完成させる。だから、「明」
と言われる。

所謂「中心となつて物事を行い、日々にその成果を挙
げる」というのは、徳を積むということ、つまり、己に
とらわれない本来の心のはたらきに基き行動するのであ
る。それで、民はその現れに信頼し、そのようであるこ
とを善しとして安住するが、それが何故自分たちに恩恵

を与え利するかはわからない。そしてまた、それは、善
を積むということ、つまり、白いものを白いと言うあり
方を継続するのである。それで、民はそのあり方を道、
手本とするが、それが何故そうであるのか、何故善であ
るのかはわからない。そして、その天下、世界の人は、
このようなあり方を神明(何故だかわからないが、優れ
たもの)に擬えるのである。

「軍の中心として日々勝ち続ける」というのは、常に
「不争」、「不費」、つまり、(自)我と(他)我との対立
という立場で争うことなく(「不争之徳」)、積み上げた
「善」を費やさずに戦い(「不費之善」)、あるべきあり
方を戦うことで示すのであり、そうであれば民は、何故
そうであるのかわからないにもかかわらず、自ずから従
い、自ずから畏怖の念を抱き、このようなあり方を、神
明に擬えるのである。 29」

6 釣者、露餌而藏鉤。故魚不見鉤而可得。賢者、隠功而隱摩。

故人不知摩而自服。故曰、主事日成而人不知也。兵勝、由於
善摩。摩隱則無從而畏。故曰、主兵日勝而人不畏也。

7 潛謀陰密、日用不知、若神道之不測。故曰、神也。功成事遂、
煥然彰著、故曰、明也。

8 聖人者、體道而設教、參天地而施化、輻光晦迹、藏用顯仁。故人安得而不知其所以利、從道而不知其所以然。故比之神明也。

9 善戰者、決禍於心胸、禁邪於未萌。故不爭爲戰、師旅不起。故國用不費、致德潛暢、玄風遐扇、功成事就、百姓皆得自然。故不之所以服、不知所以畏、比之於神明也。

其摩者、有以平、有以正、有以喜、有以怒、有以名、有以行、有以廉、有以信、有以利、有以卑¹⁰。平者靜也。正者直也。喜者悅也。怒者動也。名者發也。行者成也。廉者潔也。信者明也。利者求也。卑者諂也¹¹。故聖人所獨用者、衆人皆有之。然無成功者、其用之非也¹²。故謀、莫難於周密、說、莫難於悉聽、事、莫難於必成。此三者、唯聖人然後能之¹³。

◎ 「人」、「唯聖人」、道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。

其れ摩は、平を以てする有り、正を以てする有り、喜を以てする有り、怒を以てする有り、名を以てする有り、行を以てする有り、廉を以てする有り、信を以てする有り、利を以てする有り、卑を以てする有り。平は静なり。正は直なり。喜は悦なり。怒は動なり。名は発なり。行

は成なり。廉は潔なり。信は明なり。利は求なり。卑は諂なり。故に聖人、独り用ふる所の者は、衆人、皆之れ有り。然るに功を成す無き者は、其の之を用ふる事非なればなり。故に謀は、周密なるより難きは莫く、説は、悉聴せらるるより難きは莫く、事は必成するより難きは莫し。此の三者、唯、聖人にして然る後に之を能くするのみ。

そもそも「摩」には、種々の方法がある。「平」を用い、「正」を用い、「喜」を用い、「怒」を用い、「名」を用い、「行」を用い、「廉」を用い、「信」を用い、「利」を用い、「卑」を用いたりするのである。

「平」とは、「静」、平凡な事柄で、冷静に接することにより、相手の対応を見るのであり、「正」とは、「直」、まっすぐ包み隠さず、直にそのことを示すことで、相手の対応を見る。「喜」とは、「悦」、喜ばしいことについて、悦んでみせる事で、相手の対応を見るのである。「怒」とは、「動」、怒るべきことについて、感情を動かし怒つて見せることで、相手の対応を見る。「名」とは、「発」、名譽、立場に関わることを言い、新たな視野、立場を開き、発して見せることで、相手の対応を見る。「行」とは、「成」、行動することで既成事実を作り、それに対してど

う対応するかを見る。「廉」とは、「潔」、潔く欲にとらわれない態度で接することにより、相手の対応を見る。

「信」とは、「明」、真実を明らかにすることで、相手の対応を見る。「利」とは、「求」、利益を求めて見せることにより、相手の対応を見る。「卑」とは、「諂」、へりくだり、相手の意を迎え諂ってみせる事で、相手の対応を見る。それ故に、この聖人だけが使っているものは、衆人、一般の人々に皆備わっているものなのである。ところが、実際に成果を収めるものがないというのは、彼らが、自己を基準に判断し、己にとらわれているため、その使い方を誤っているからである。従って、「謀」、計画では、相手にこちらの意図を知られぬよう周到秘密にすること以上に難しいものはなく、「説」、こちらの意図を示して動かすときは、尽く聴き従われる以上に難しいものはなく、「事」、その計画の実行は、必ず完成させること以上に難しいものはない。

この三者は、聖人であつて初めてできることである。

30

10 凡此十者、皆摩之所由而發。言人之材性參差、事務變化。故摩者、亦消息盈虛、因幾而動之。

11 名、貴發揚、故曰、發也。行、貴成功、故曰成也。

12 言上十事聖人獨用以爲摩而能成功立事。然衆人莫不有[□]、所以用之非[□]道。故不能成[□]。

13 謀、不周密、則失幾而害成。説、不悉聽、則違順而生疑。事、不必成、則止贊而有廢。皆有所難、能任之而無難者、其唯聖人乎。

故謀必欲周密、必擇其所與通者説也。故曰、或結而無隙也¹⁴。夫事成、必合於數。故曰、道數與時相偶者也¹⁵。説者聽、必合於情。故曰、情合者聽¹⁶。故物歸類、抱薪趨火、燥者先燃。平地注水、濕者先濡。此物類相應、於勢譬猶是也。此言內符之應外摩也如是¹⁷。故曰、摩之以其類、焉有不相應者。乃摩之以其欲、焉有不聽者。故曰、獨行之道¹⁸、夫幾者不晚、成而不抱、久而化成¹⁹。 31

故に謀は、必ず周密ならんと欲すれば、必ず其の与^とに通ずる所の者を択びて説くなり。故に曰く、或は結びて隙無きなり、と。夫れ事の成るや、必ず数に合す。故に曰く、道数は時と相ひ偶する者なりと。説く者の聴かるるは、必ず情に合すればなり。故に曰く、情、合する者

は聴かると。故に物は類に帰す。薪を抱きて火に趨けば、燥者先づ燃ゆ。平地、水を注がば、湿者先づ濡ふ。此れ物類の相応にして、勢に於いて譬ふれば、猶ほ是のごときなり。此れ内符の外摩に応ずるや、是の如きを言ふ。故に曰く、之を摩するに其の類を以てすれば、焉んぞ相ひ応ぜざる者有らんや。乃ち之を摩するに其の欲を以てすれば、焉んぞ聴かざる者有らんやと。故に曰く、独行の道、夫れ幾は晩からず、成りて抱かず、久しくして化成す、と。

31

それ故に、「謀」、計画、はかりごとは、必ず周到秘密にしよとすするなら、必ずその人が共に心の通じあう者を選んで、その者にその計画を説くのである。だから、結びついたら一つのように隙間もない、と言われる。

そもそも、そのこと、計画が完成するのは、必ず理にかなっているのである。だから、車の両輪のように、理のある方法は、時と寄り添う、と言われる。

こちらの言葉が聞き入れられるのは、必ず相手の「情」、本音に合致するからである。だから、「情」、本音が合致するものは聞き入れられる、と言われる。

それ故に、物事は同質のものに帰一する。薪を抱えて火に投げ込めば、より乾燥しているものからまず燃える。

平らな地面に水を注げば、より湿ったところからまず濡れる。これが、同類の物事が相応じて引き合うということであり、「勢」、物事の形勢、流れ、かたちに於いて譬えれば、ちょうどこの様なものである。これは、「内符」、心の内の割符が、「外摩」、外からの探りにこのように応ずることを言うのである。

それ故に、「類」、その相手の持つ同質同類のものを以つて「摩」し、探りを入れたなら、どのような相手でも必ず応ずる、と言われる。つまり、相手の欲するものを以つて「摩」するなら、聞き入れない者などいないのである。

故に、聖人にして初めてできる「独行の道」は、己にとらわれずあるべくあるなら、そもそも「幾」、物事を計画し実行するきつかけ、に遅いということはない。完成してもその成果にしがみついたりしない。そのように己を越えることが久しく持続できるなら、やがて聖人そのもののあり方に変化し一体化する、と言われる。 31

14 爲通者、説謀、必虚受、如受石投水、開流而納泉。如此則何隙而可得。故曰、結而無隙也。

15 夫謀成、必先考合於術數。故道、術、時三者相偶合。然後事

可成而功可立也。

16 進説而能令聽者、其唯情合者乎。

17 言内符之應外摩、得類則應。譬猶水流就濕、火行就燥也。

18 善於摩者其唯聖人乎。故曰、獨行之道也。

19 見幾而作、何晚之有、功成不拘、何抱之有。久行此二者、可以化天下。

權 第九

説者、説之也。説之者、資之也¹。飾言者、假之也。假之者、益損也²。應對者、利辭也。利辭也、輕論也³。成義者、明之也。明之者、符驗也⁴。難言者、却論也。却論者、釣幾也⁵。佞言者、諂而⁶忠⁶、諛言者、博而⁷智⁷、平言者、決而⁸勇⁸、戚言者、權而⁹信⁹、靜言者、反而¹⁰勝¹⁰。先意承欲者、諂也。繁稱文辭者、博也。縱舍不疑者、決也。策選進謀者、權也。先分不足而窒非者、反也¹¹。

◎ 「説者、説之也。」、道藏本「説之者、説之也」に作る。

32

上の「之」字衍。嘉慶十年本によつて削る。◎ 「干」五字、道藏本総て「于」に作る。嘉慶十年本によつて改める。◎ 「博」道藏本「博」に作る。嘉慶十年本によつて改める。◎ 「縱舍不疑者、決也。策選進謀者、權也。」、道藏本「策選進謀者、權也。縱舍不宜者、決也。」に作る。句の顛倒。「宜」は「疑」の誤。嘉慶十年本によつて改める。

權 第九

説とは、之に説くなり。之に説くとは、之に資るなり。飾言とは、之に仮るなり。之に仮るとは、益損するなり。應對とは、辞を利くするなり。辞を利くするとは、輕論するなり。義を成すとは、之を明らかにするなり。之を明らかにするとは、符驗するなり。難言とは、論を却くるなり。論を却くとは、幾を釣るなり。佞言は、諂いて忠を干む。諛言は、博くして智を干む。平言は、決して勇を干む。戚言は、權りて信を干む。静言は、反して勝を干む。

意に先んじて欲を承くるは、諂なり。文辞を繁稱するは博なり。縱舍、疑はざるは、決なり。策選進謀するは、權なり。先づ分足らざるに窒非するは、反なり。

32

「説」、説くということ、具体的な相手に説くということである。その、相手に説くということは、その相手からこちらの望む言葉を取ることである。「飾言」、言葉を飾るといふのは、相手のあり方に因るのである。相手のあり方に因るといふのは、言葉を増減するのである。

「応対」、とは、言葉を速やかにすることである。言葉を速やかにするといふのは、軽論すること、言葉を軽やかに、深刻にせず話すのである。「成義」、筋を通すといふのは、そのことを明らかにするのである。そのことを明らかにするといふのは、実証するのである。「難言」、言葉でなじるとは、相手の論、言っていることを退けるのである。言っていることを退けるとは、幾を釣る、相手の本音のきざしを釣り上げるのである。

「佞言」、おもねる言葉は、諂って、忠、真心があると
思わせたいのである。「諛言」、巧みに人の気を引く言葉は、博識であり知恵があると思わせたいのである。「平言」、包み隠さずに言う言葉は、「決」、決め付けることで勇氣があると思わせたいのである。「戚言」、心配そうな言葉は、「権」、そのことをいろいろと謀ってみせる事で、信頼できると思わせたいのである。「静言」、強いて冷静な

言葉は、「反」、自らの本音に反し、さかさまの態度で相手に勝っていると思わせたいのである。

相手の気持ちに先回りして、その欲するところを迎えるのは、「諂」、諂いである。言葉数多く、表現を飾り立てて言うのは、「博」、博識ということである。投げ出し捨てて自ら疑わないのは、「決」、決め付け、決心しているということである。いろいろなやり方を選び計画を進めるのは、「権」、謀るといふことである。はじめからそれに相応しくないのにわかまえず、相手の言葉を塞ぎ、非難するのは、「反」、さかさまということである。 32」

1 説者、説之於彼人也。説之者、有資於彼人也。資、取也。

2 説者、所以文飾言語、但假借以求入於彼、非事要也。亦既假之、須有損益。故曰、假之者、損益也。

3 謂彼有所問、卒應而對之者、但便利辭也。辭、務便利、故所論之事、自然利辭、非至言也。

4 覈實事務以成義理者、欲明其眞僞也。眞僞既明、則符驗自著。故曰、明之者、符驗也。言或反覆、欲相却也。

5 言或不合、反覆相難、所以却論前事也。却論者、必理精而事明、幾微可得而盡矣。故曰、却論者、釣幾也。求其深微曰釣也。

6 諛者、先意承欲、以求忠名。故曰、諛而干忠。

7 博者、繁稱文辭、以求智名。故曰、博而干智。

8 決者、縱舍不疑、以求勇名。故曰、決而干勇。

9 戚者、憂也。謂象憂戚而陳言也。權者、策選進謀、以求信名。

故曰、權而干信。

10 靜言者、謂象清淨而陳言。反者、先分不足、以窒非以求勝名。

故曰、反而干勝。

11 己實不足、不自知而內訟、而反攻人之過、窒他爲非、如此者、

反也。

故口者、機關也。所以關閉情意也。耳目者、心之佐助也。

所以窺聞見姦邪。故曰、參調而應、利道而動¹²。故繫言而不亂、翱翔而不迷、變易而不危者、觀要得理¹³。故無

目者、不可示以五色、無耳者、不可告以五音¹⁴。故不可以往者無所聞之也。不可以來者無所受之也。物有不通者、聖人故不事也¹⁵。古人有言曰、口可以食、不可以言者、有諱忌也。衆口爍金、言有曲故也¹⁶。

33

◎「機」、道藏本「幾」に作る。嘉慶十年本によつて改める。
◎「關」、聖人」、道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。

故に口は、機關なり。情意を關閉する所以なり。耳目は、心の佐助なり。間を窺ひ姦邪を見る所以なり。故に曰く、參、調ひて応ずれば、道に利ありて動く、と。故に繫言して乱れず、翱翔して迷はず、變易して危うからざる者は、要を觀、利を得ればなり。故に目無き者は、示すに五色を以てすべからず。耳無き者は、告ぐるに五音を以てすべからず。故に往を以てすべからざる者は、之を開く所無きなり。來を以てすべからざる者は、之を受くる所無きなり。物、通ぜざる者有り、聖人は故に事とせず。古人、言有り、口は以て食らうべきも、以て言ふべからずと曰ふ者は、諱忌有るなり。衆口、金を爍すは、言、曲有るが故なり。

33

だから、口とは一つの機關なのであり、情意、本音や氣持ちを關閉して出入させる道具である。耳目は、心

の補佐、補助である。間、隙を窺い知り、不正邪惡を見抜く道具である。それ故に、口、耳、目の三者が調和して物事に対応するなら、道、あるべきあり方に効果的にはたらく、と言われる。

それ故に、言葉を連ねても乱れず、あちこちと話題を転じても迷わず、その言葉を変化させても危うくないのは、物事の要を見抜き、道理を得て然るべく対応しているからなのである。

それ故に、目が無い者には様々な色、文字、文章を示すことはできないし、耳の無い者には様々な音、言葉を聞かせることはできない。

それ故に、言葉によつてつかみ得る「往」、過去の事柄でなければ、そのことをはつきりと開き示せる相手はない。言葉によつてつかみ構想し得る「來」、将来の事柄でなければ、そのことを受け入れる相手はない。物には、言葉によることでは通じないものがある。聖人は、それ故、事として扱うことはない。古の人の言葉に、「口は何でも食ふことができるが、何でも言うことはできない。」というのがあがるが、それは、忌諱、言葉にすることを忌み嫌うものがあるのである。(それは、相手の前提、立場を覆してしまう様な真実を真実としてありのままに言うことである。)多くの人が言う言葉が、金(真実)を

も溶かすのは、言葉には、その人の立場、前提によつて「曲」、曲がるということがあがるからなのである。 33

12 口者、所以發言語。故曰、口者、機關也。情意宜否、在於

機關。故曰、所以關閉情意也。耳目者、所以助心通理。故曰、心之佐助也。心得耳目、即能窺見間隙、見彼姦邪。故曰、窺聞見姦邪。耳目心三者、調和而相應感、則動必成功、吉無不利、其所以無不利者、則以順道而動。故曰、參調而應、利道而動也。

13 苟能親要得理、變可曲成不失。故繁言紛葩而不亂、翱翔越道而不迷。變易改常而不危者也。

14 五色、爲有目者施。故無目不可得而示。五音、爲有耳者作。故無耳者不可得而告。此二者爲下文分也。

15 此不可以往說於彼者、爲彼暗滯無所可開也。彼所以不來說於此者、爲此淺局無所可受也。

16 口食可以肥百體、故可食也。口言或可以招百殃、故不可以言也。言者、觸忌諱。故曰、有忌諱也。金爲堅物、衆口能燦之、則以衆口有私曲故也。故曰、言有曲故也。

人之情、出言則欲聽、舉事則欲成¹⁷。是故智者不用其所短、而用愚人之所長、不用其所拙而用愚人之所工、故不困也¹⁸。言其有利者、從其所長也。言其有害者、避其所短也¹⁹。故介虫之悍也、必以堅厚、螫蟲之動也、必以毒螫。故禽獸^知用其長、而談者^亦知^其用^而用也²⁰。故曰、辭言^有五、曰病、曰怨、曰憂、曰怒、曰喜²¹。病者、感衰氣而不神也²²。怨者、腸絕而無主也²³。憂者、閉塞而不泄也²⁴。怒者、妄動而不治也²⁵。喜者、宣散而無要也²⁶。此五者精則用之、利則行之²⁷。

◎「知」、「而」道藏本「之」、「其」に作る。嘉慶十年本によつて改める。◎「亦」、「其」、「有」、道藏本欠。嘉慶十年本によつて補う。

人の情、言を出せば、則ち聴かれんと欲し、事を挙げれば、則ち成さんと欲す。是の故に智者は其の短なる所を用ひず、愚人の長する所を用ひ、其の拙なる所を用ひずして愚人の工なる所を用ふ。故に困まず。其の利有りと言ふ者は、其の長する所に従ふなり。其の害有りと言ふ者は、其の短なる所を避くるなり。故に介虫の悍^よきや、必ず堅厚を以てし、螫^{せきちゆう}蟲の動くや、必ず毒螫を以てす。故に禽獸は其の長を用ふるを知る、而して談者も亦、其の用を知りて用ふるなり。故に曰く、辞言、五有り、曰

く、病、曰く、怨、曰く、憂、曰く、怒、曰く、喜。病とは、衰氣に感じて神ならざるなり。怨とは、腸絶えて主無きなり。憂とは、閉塞して泄れざるなり。怒とは、妄動して治まらざるなり。喜とは、宣散して要無きなり。此の五者は、精なれば則ち之を用ひ、利あれば則ち之を行ふ。

34

人の情、本音としては、何事かを言つたならば、他人に聞き入れられたいと思うものであり、何事かを行つたならば、完成させたいと思うものである。(人はそれほどまでに己に執着するものである。)それ故に、智者は、己に執着して自分の劣つているところを用いたりせず、愚人が優れているところを用い、自分の拙いところを用いずに、愚人が巧みなところを用いる。だから苦しむことはない。その事に利が有ると言う場合、それはその優れた点に従うということである。そのことに害が有ると言う場合、それはその劣つた点を避けるということである。だから、貝や亀などの殻を持ったものの強さは、必ずその殻の堅さ厚さに因るものであり、毒虫の行動は、必ずその毒を持つことに因るのである。だから、禽獸は、自らの持ち前の優れている部分を使うことを知っているのであり、談者、人に説く者も、その持ち前のはたらきを

知つたうで用いるのである。

それ故に、言葉の状態には五種類がある。それは、「病」、「怨」、「憂」、「怒」、「喜」である。

「病」とは、気が滅入つて活力がないのである。「怨」とは、腸が煮えくり返つて、どうするとういう主体的決断ができないのである。「憂」とは、自分の殻に閉じこもり、外部にその意思が漏れず、対応できないのである。「怒」とは、心の調和を失い、感情が妄動して止められないのである。「喜」とは、いろいろと言ひ立てるが、要点がないのである。この五者は、その状態を自らよく理解し、精通したならこれを用い、相手に効果があれば、これを実行するのである。

34

17 可聽在於合彼、可成在於順理。此爲下起端也。

18 智者之短、不勝愚人長。智者之拙、不勝愚人之工。常能棄此拙短而用彼工長。故不困也。

19 人能從利之所長、避害之所短。故出言必見聽、舉事必成功也。

20 言介虫之捍也入堅厚以自藏、螿蟷之動也、行毒螫以自衛。此用其所長。故能自免於害。至於他鳥獸、莫不知用其長以自保

全。讀者感此、亦知所用而用也。

21 五者有一、必失中和而不平暢。

22 病者、恍惚。故氣衰而言不神也。

23 怨者、內動。故腸絕而言無主也。

24 憂者、快悒。故閉塞而言不泄也。

25 怒者、鬱勃。故妄動而言不治也。

26 喜者、搖蕩。故宣散而言無要也。

27 此五者、既失於平常。故用之在精、而行之在利。其不精利則廢而止之也。

故與智者言、依於博、與拙者言、依於辨、與辨者言、依於要、與貴者言、依於勢、與富者言、依於高、與貧者言、依於利、與賤者言、依於謙、與勇者言、依於敢、與愚者言、依於銳。此其術也。而人常反之²⁸。是故與智者言、將以此明之。與不智者言、將以此教之、而甚難爲也

29. 故言多類、事多變。故終日言不失其類而事不亂³⁰。
終日不變而不失其主。故智貴不妄³¹、聽貴聰、智貴明、
辭貴奇³²。

◎「賤」、「愚」、「二箇所の「以此」、道藏本「賤」、「過」、「此
以」に作る。嘉慶十年本によつて改める。

故に智者と言ふは博に依り、拙者と言ふは辨^{べん}に依り、
辨者と言ふは要に依り、貴者と言ふは勢に依り、富者と
言ふは高きに依り、貧者と言ふは利に依り、賤者と言ふ
は謙に依り、勇者と言ふは敢に依り、愚者と言ふは銳に
依る。此れ其の術なり。而るに人は常に之に反す。是の
故に智者と言ふは、將に此を以て之を明らかにせんとなす。
不智者と言ふは、將に此を以て之を教へんとす。而るに
甚だ為し難きなり。故に言は類多く、事は變多し。故に
終日、言、其の類を失はざれば、而ち事^{すなは}乱れず。終日變
ぜざれば、而ち其の主を失はず。故に智は不妄を貴び、
聰は聰を貴ぶ。智は明を貴び、辭は奇を貴ぶ。

それ故に、智者と話すときは、彼が価値ありとする博
い知識により、拙者、鈍い人と話すときは、彼の懂れる
巧みな弁舌により、弁者、言葉巧みな人と話すときは、
彼が価値を認める要点をつくことにより、貴者、地位や

身分の高い人と話すときは、彼の認める権勢により、富
者、資産のある人と話すときは、彼の望む高級なものや
ことにより、貧者と話すときは、彼の欲している利益に
より、賤者、身分地位の低い人と話すときは、彼の認め
る価値である謙虚さにより、勇者と話すときは、彼が自
ら恃む勇敢さにより、愚者と話すときは、彼の自負する
鋭敏さによる。これがその術、対応方法である。それな
のに、人は自分を中心にものであるので、常にこのさか
さまをする。

この様であるので、智者と話すときは、この術を使つ
て、この対応するということを明らかにしようとし、智
ならざる者と話すときは、この術を使って、この対応す
るということを教えようとするのだが、極めて為し難い
ものがある。それ故に、言葉には、対応を異にする多く
の種類があり、それに伴い、物事には、対応すべき変化
が多いのである。それ故に、終日対応し、言葉がその対
応すべき類別を見失わなければ、物事は乱れたりしない。
そして、終日対応し、その物事がこちらの意図に反して
変化しなければ、その主体性を失うことはないのである。
それ故に、「智」、見識、判断は、不妄、筋が通っている
ことが大切なのであり、「聰」、理解は、聰、はつきりし
ていることが大切であり、「智」は、明らかであることが

大切であり、「辞」、言葉は、奇、優れて説得的であることが大切なのである。

35

28 此量宜發言之術也。不達者反之、則逆理而不免成於害也。

29 與智者語、將以明斯術、與不智者語、隨以此術教之。然人迷日久、教之不易、故難爲也。

30 言者、條流舛隨。故多類也。事則隨時而化。故多變也。若言不失類、則事亦不亂也。

31 不亂、故不變。不變故其主有常。能令有常而不變者、智之用也。故其智可貴而不妄。

32 聽聰則眞偽不亂。知明則可否自分。辭奇則是非有證。三者能行則功成事立、故須貴之。